

北川和彦教授記念号に寄せて

北川和彦先生は1982年4月、立教大学経済学部へ赴任され、30年の長きにわたって本学の教育・研究及び大学運営に尽力されました。北川先生は赴任以来、経済原論B、経済学のための数学入門など、近代経済学関係のカリキュラムの充実を主導され、また自らこれらの授業科目を担当されました。特に経済原論Bは経済学部のカリキュラムにおける基幹科目であり、ミクロ経済学とマクロ経済学の両分野の基礎的な考え方を学生に教授するとともに、より進んだ専門科目への導入部としての役割を担っています。この科目において北川先生は、ミクロ経済学とマクロ経済学をそれぞれ別個に扱うことをあえてせず、これらの基礎的な概念を習得させるとともに、両者の相違あるいは対抗関係を強調して、それぞれが経済認識や政策においてもつ含意を理解させるという本学経済学部特有の近代経済学教育のモデルを作られました。その指導は熱心かつ丁寧であり、個別の指導を請う学生が北川先生の研究室の前に遅くまで列を作る姿もしばしばみられました。

北川先生の研究は、大きく二つの分野に分けることができます。ひとつはP. スラッフアの研究であり、もう一つはJ. M. ケインズの研究です。前者は、限界理論に基づいて価格と分配関係の同時決定を主張する新古典派経済学に対し、資本の集計方法や限界生産力に関して新古典派経済学が依って立つ諸前提の非現実性を指摘したうえで、スラッフアの議論がこうした前提に依らずに価格体系を決定する試みであると位置づけ、その特徴を明らかにするものでした。そこでは新古典派経済学だけでなく、マルクス経済学とスラッフアの関係など、多くの論点が扱われています。

もう一つの研究分野であるケインズ経済学について、北川先生はケインズの不十分さを認識しつつも、新古典派経済学を出自としつつその欠陥を鋭く抉る経済学である、との評価に基づいて研究を進めてこられました。このような北川先生のケインズ研究は、新古典派経済学の枠内にケインズを位置づけようとするニュー・ケインジアン議論とは対極にあり、新古典派経済学の非現実性に対する批判をその軸とするものであります。北川先生は、流動性選好説こそケインズ経済学の核心だと主張する多くの伝統的なケインジアンとは異なり、資本の限界効率の脆弱さが失業の原因であることを強調する点こそケインズ経済学の核心であるとして、長期期待の不安定さを重視する主張を展開してこられました。

北川先生の研究はいずれも、現在の経済学の主流を形成している新古典派経済学に対する鋭

い批判を根底に持ち、それに対する代替理論を提示するという問題意識に貫かれています。さらに、スラッファ及びケインズに対しても、それを無批判に受け入れることなく、その限界についても鋭い目を向けておられます。時流に安易に同調せず、自らの判断をこつこつと積み上げていく研究姿勢は学生、大学院生に強い影響を与え、北川先生のもとで多くの若い研究者が育っていきました。

北川先生は大学及び学部の運営にも大きな力を発揮され、経済学科長、経済学部長・経済学研究科委員長、大学院主任などを相次いで歴任されて、誠実に多くの仕事をしてこられました。なかでも、経済学部長・経済学研究科委員長として設置を実現した大学院国際企業環境コースは、経済学研究科における社会人向け大学院教育の水準を一挙に高めました。

このように、北川先生は、教育・研究及び大学運営を通して本学及び経済学部・経済学研究科の発展に多大な貢献をしてこられました。

本学部一同、北川先生が今後とも健康で過ごされ、研究をはじめとするさまざまな分野で活躍されることを願っております。

2013年1月

経済学部長 池上 岳彦